

俳句雑誌



空

令和5年3月15日発行

第105号

第105号



2023・3・4

**SORA** 105号

糸田

宮井知英

ものの芽や命湧くときみな赤し  
筆意とは湧いて来るもの春の雪  
惜春や氷枕の水音も  
落椿蜜の涙を流しけり  
囀や何れは藪となる畠

粕屋

吉田 葎

捨案山子脛ながながと横たはる  
雪晴や幌より漏るる牛のこゑ  
駆けつくる隊員拾ひ消防車  
目の高さ合はせて値切る年の市  
武器持たぬ手のひらひらと大焚火

福岡

永淵 恵子

熱風の塊となり市電来る  
爆心地へ汗の修学旅行団  
夜の蟬微熱のひかぬ爆心地  
二十六聖人祈りの口を開け灼くる  
炎天や登りつめたる先も坂

大野城

森田 明成

虫喰ひのキャベツ畑の盛んなる  
五月雨や取説読まず捨てられず  
ゆるびなき城の石垣青あらし  
山里や水打つてある無人駅  
街なかはどこどころの蟬時雨

福岡

あさなが捷

父の忌の蠅取紙の螺旋かな  
はがれたる鱗も揺るる腹酒  
夏草を刈る直角に鎌当てて  
逝く友よ集合場所はあの花野  
たてよこの棒に還りし案山子かな

千葉

原 友子

一ミリの棘指に透く大暑かな  
草刈つて径とり戻す一軒家  
白日傘乗馬クラブのチラシ受く  
味噌で食ふ挽ぎたて胡瓜山滴る  
はらからのおほかた鬼籍豆ごはん

兵庫

えとう 樹里

木簡の埋る草原揚雲雀  
若芝や犬の毛並をほめ合つて  
はばかりの中まで草を刈る匂ひ  
夏草へ紙飛行機の墜落す  
著我の花かつて家並のありし道

大阪

田岡 千章

更衣項の細き夢二の画  
花石榴古井の底の浅かりし  
花南天轍を細く車椅子  
風薫る田辺聖子のなには弁  
殊更のことなく父の日の過ぎぬ



熊本 松田明子

四十八瀬棹一本の川下り

築茶屋を包みて余る水の音

生き生きと生簀に泳ぐ罔鮎

尺鮎の尾の美しく焼かれあり

滝壺を抜けさせらぎの音となる

広島 星加鷹彦

新茶届く八女の天地封じ込め

露天風呂葭簀隔てて鄙ことば

大陸の風真直ぐに海の家

さびれゆく開拓の村青嵐

正座する老婆の袴り八月来

岡垣 田中とし江

氷菓もち腰でドア押す港町

ワイナリーへ馬の鬣秋高し

曼珠沙華蕊そりかへる力あり

紅葉狩ぜんざい食べて折り返す

消ゆるまで犬と佇ちをり秋の虹

直方 曾根富久恵

弁当の割箸は華奢冷房車

黒揚羽夕日射しこむ切通し

空洞の骸はまだ蟬の形

念ずれば一雨きたる冷し瓜

手の平の守宮見せくる子供かな

北九州 兒玉充代

考ふる力うするる溽暑かな

朝だけの涼しさ鳥の鳴きにけり

仏足石ほつほつ濡らすほどの喜雨

金物屋の奥ほの昏き洪団扇

老鶯に目覚めて旅にあるごとし

太宰府 山本則男

籠枕はづれて夢を忘れゆく

帰省子を驚かしたる鶏の声

屑金魚掬はれてより主役なる

水を打つ暮しに至福ありにけり

来し方を広ぐるごとく水を打つ

直方 石橋幾代

投げ出しし素足より来る海の風

尾の部分だけを貰ひぬ蛇の衣

歪なる茅の輪に空のゆがみけり

新聞を丸めて蠅に不意討を

たんたんとせし盆唄のまま果つる

北九州 坂口学

飛石を隠す人波夏越祭

白亜紀の牙出でし谿青あらし

魚道無き堰の水音鵜渡る

大岩が分くる流れや夏来る

万緑へ真つ逆さまに山鴉



福岡

秋津 令

花は葉となりて水面に触れてをり  
少年がポケットより出す蜥蜴の子  
赤奪ひ尽くす閻魔や夏旺ん  
我をもととぎる家系夏の月  
リハビリの十歩が遠し秋桜

北九州

河原 敬子

をさな子が昔ねと言ふ金魚玉  
勉強にあきて青柿数へをり  
襖外し裸見られてゐるやうな  
あれこれと氣遣ひさるる暑さかな  
こなせるは日に一つだけ冷奴

東京

山田 正子

草を刈る匂ひの中に遭難碑  
縁側に柿むきながら聞き上手  
道化師の投げ銭受くる夏帽子  
思ひ出し笑ひや梨に刃を当てて  
西瓜抱き円周率をつぶやきぬ

兵庫

大西 乃子

料理の本片手にトマト煮詰めをり  
理髪屋の軒に今年もつばめの子  
箱詰めのみかりまみれのさくらんぼ  
水に咲き水になじみし水中花  
先生のきれいな声や涼新た

北九州

横田 敬子

麦秋や農家に子守居りし頃  
亀の子のゆつくり泳ぐ用水路  
使ひこみし箒立てあり半夏生  
白鷺の降るる余地なき青田かな  
コスモスの種蒔かれをり休耕田

東京

今井 康子

唐黍の律義に並ぶ粒かじる  
青梅雨や宿の主人はもと漁師  
夕涼やコーヒー豆を挽く音も  
まだ話足りずに真夜の水羊羹  
老後にも休日のある夏料理

長崎

仲里 奈央

さかさまに見たき世のなかソーダ水  
蝉時雨おつかひの子は駆け出して  
指先に墨汁のあと夏の空  
ペディキュアはらしくなき色夏休み  
何色に塗れば正解夕焼空

長崎

松尾 龍之介

ノンちゃんど歩いてみたし花の雲  
桜蕊ふる廃屋の郵便受け  
死は生者のみにもたれて花茨  
見てくれはベジタリアンの天道虫  
夏つばめ薨統べたる鬼瓦



直方 吉田悦子

補助輪の取れし自転車夏休み  
白粉は亡き母の香や夕螢  
声に出しひらがな読む子立葵  
工場のサイレン響く秋夕焼  
秋晴や色豊かなるお弁当

福岡 三井所美智子

聖水の貝殻の襞夏めけり  
遠雷や魚屋の前の干魚棚  
注連張りし常燈の鼻灼けてをり  
黒南風や倉庫滑車の太き縄  
半夏雨藤浦洗の歌碑濡らす

兵庫 青木朋子

文字のみが届く母の日鳥の声  
亡き母と自分にカーネーションを買ふ  
カーネーション半額となる月曜日  
湖は木々に囲まれ夏に入る  
麦の秋石蹴り帰る女の子

兵庫 林徹也

父の痕なぞる文机夜半の秋  
魚屋も本屋も更地秋の風  
酒蔵の屋根燦々と田水張る  
先の世も後の世も無し蟬しぐれ  
三代の時計を正す盆用意

福岡 栗原京子

薔薇の名は覚えぬままに園去れり  
叱られしごとうつむけり雨のバラ  
町内の一軒ごとに違ふ薔薇  
藻の花や天守への道どこも似て  
譲り合ひしてゐる母と茅の輪かな

兵庫 岡村尚子

島山の海へかたむく良夜かな  
リハビリの杖の運びや秋の雨  
見上ぐればたと止みたる秋の蟬  
病院の夕餉の時刻法師蟬  
ふるさとは潮風にほふ星月夜

北海道 押田裕見子

呼出しの片手で開く扇子かな  
切傷の血を舐めてをり夕薄暑  
青春は立夏の海の波頭  
涼風や仏具を磨く僧の妻  
眼に碧く耳に轟くはたた神

兵庫 岩井京子

手の餌をつつく白鳩五月来る  
家中の螺子に油を差して梅雨  
梅雨に入る前に球根掘り上ぐる  
雀の子羽根ふるはせて餌をねだる  
涼風に縫ふ手やすむる夕べかな



神奈川

窪みち子

さくらんぼさざめきをりぬ白磁皿

下闇に白き茸のくねりをり

未央柳園児の黄帽子まぎれ込む

緑蔭やテントに親子昼寝して

飛びつきし子は花椎の香にまみれ

